

## 28. タンザニアの風土・人と素朴な民芸

### (1) はじめに

前回に続いて今回もタンザニアを題材とした。タイトルをみて水と関係がないではないかと批判されそうであるが、風土の中にあつて水の存在が如何に大きいかという視点からお読みいただければ幸いである。

筆者は海外調査の合間に地元の民芸品を収集し、持ち帰ってくる癖がある。それらの中で、これはというものは書齋に並べてあるが、その他は物置に積んだままである。“年を考えて何とかして”と家内からの苦情が絶えない。

もちろん専門家ではないので系統立った話にはならないが、中でも渡航回数の多かったタンザニアのものを紹介することにする。

さて、タンザニア連合共和国（通称タンザニア）は、中央アフリカ東部の共和制国家で、図1のようにケニア、ウガンダ、ルワンダ、ブルンジ、ザンビア、マラウイ、モザンビーク、ザイル（現コンゴ民主共和国）と国境を接し、東はインド洋に面している。アフリカでも有数の大自然に恵まれ、風土豊かな国土である。

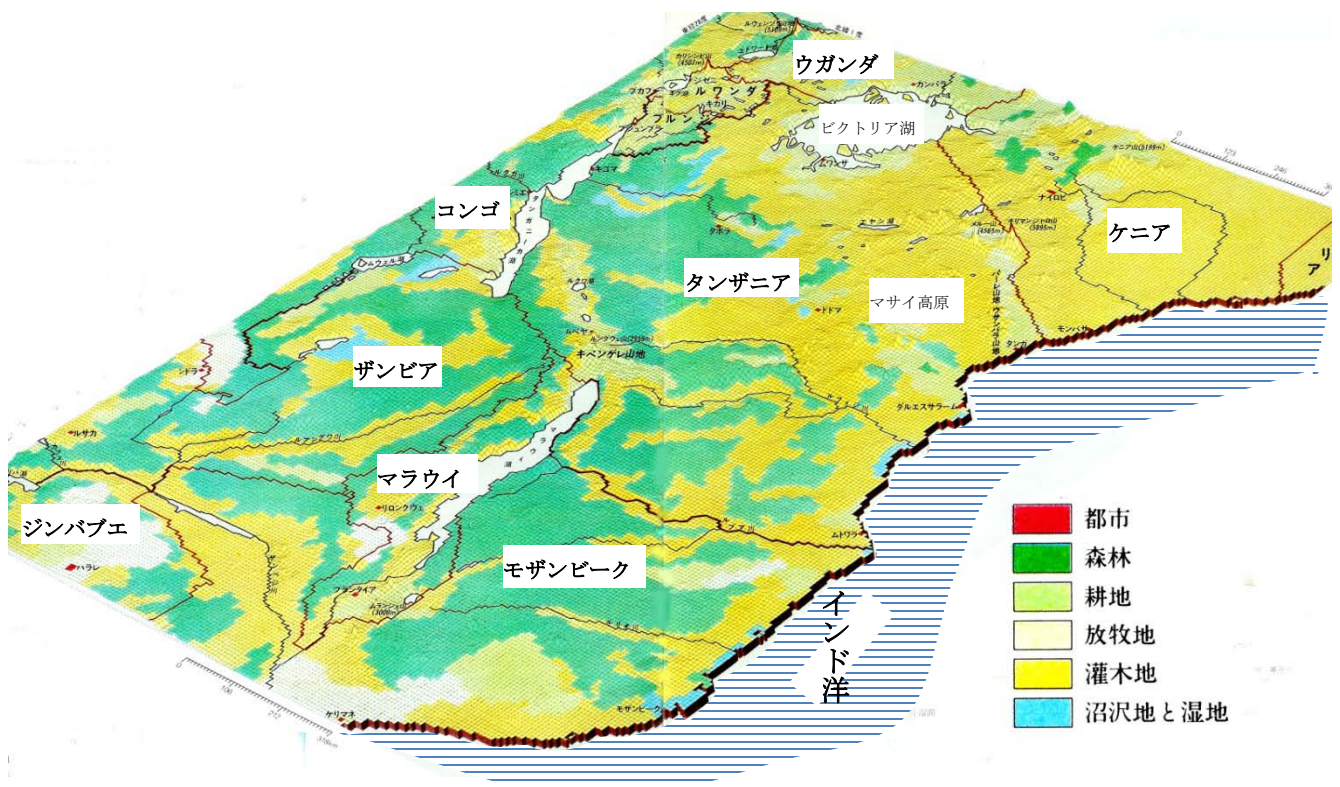


図1 タンザニアとその周辺諸国

(出典：世界の地理 朝日百科 107 (朝日新聞社) 中・南アフリカ、一部加筆)

これらの大自然の中で特に心に深く刻まれている風景が3つある。すなわちバオバブの木、雨上りの虹、インゼルベルク<sup>脚注</sup>がそれである(写真1~3)。



写真1 巨大なバオバブの木

にタンザニアの風土に接すると、このイメージはマスコミなどによって植えつけられた先入観が大きいような気がする。



写真3 インゼルベルグ

以来報告書は4号まで印刷したが、全部青~緑色系である(図2)。

調査の過程でタンザニアの人々の美的感覚が鋭いことを知ってびっくりしたことが一度ならずあったが、このような大自然の中で本能的に培われてきたものだろうか。

アフリカというと“乾ききった緑乏しい大地”というイメージが強いが、実際



写真2 雨上りの虹

話は余談になるが、調査報告書の作成に際して、表紙の色を“乾燥”をイメージした黄色系にして提案したところ、先方機関のカウンターパートから緑色系にしてくれとの注文がきたが、それも理のあることと感じ入ったこともある。それ

脚注：(独：inselberg)「なだらかな傾斜をもった周囲の地形から飛び出した、急な斜面をもつ丘」と定義され、乾燥地帯(特にアフリカ南部)に特徴的にみられる。



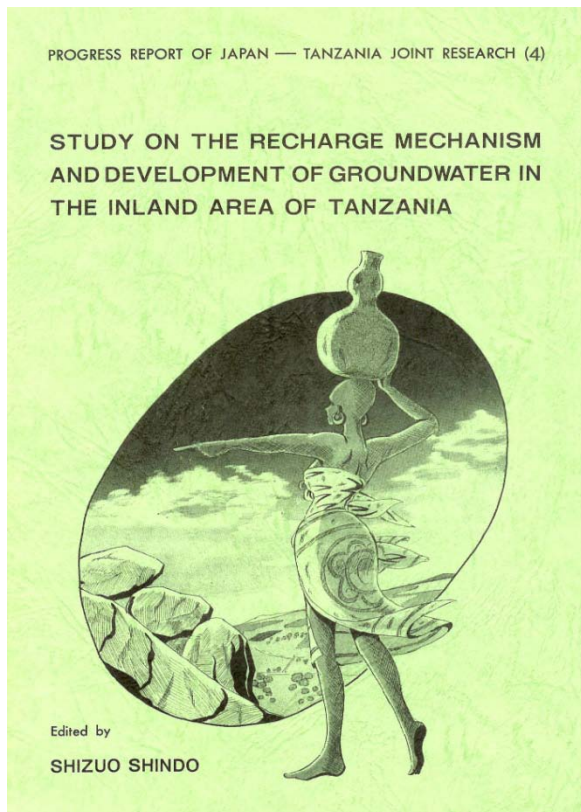


図 2 報告書の表紙

(絵は筆者の教え子で現地調査にも参加した重久恭子君によるもの)

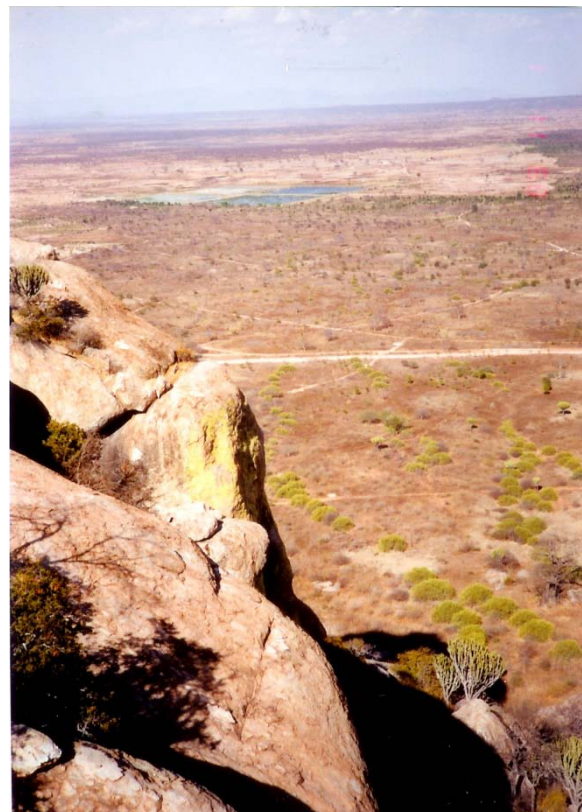


写真 4 左図の背景となった風景

(インゼルベルグの頂上からの景観)

## (2) タンザニアの風土

国名のタンザニアは 1964 年に統合したタンガニーカとザンジバル両国の頭文字に、かつてタンガニーカ北部で栄えたアザニア文明（別天地の意味）の名を加えたものに由来している。

この国は約 130 もの少数民族からなっていることが特徴で、アフリカ人以外では、インド・パキスタン系、アラブ系、ヨーロッパ人などがいる。初代大統領ニエレレの政策で、すべての地域にすべての部族が混合して生活している。これはウジャマー（家族主義・社会主義）政策と呼ばれ、部族間の対立を少なくすることを目的としている。

言語は部族ごとに異なっているが、統一言語としてスワヒリ語が用いられている。タンザニア建国にあたって、激しい部族抗争がなかったのは、大きな部族がなかったことに加えて、共通語としてスワヒリ語が広く使用されていたためである。なお国旗の黒は国民、



写真 5 タンザニアの国旗

緑は国土と農業、青はインド洋を表している（写真 5）。

タンザニアの地勢は図 3 にあるように大きく 3 つに区分される。すなわち、インド洋に面した海岸地方、その背後にあって北東-南西にのびる山脈地帯によって画された中央部の高原地帯、さらに西端部にあるタンガニーカ湖やマラウイ湖のある湖沼地帯である。

高原の北東部にはキリマンジャロ山(5895m)やメルー山(4565m)のあるウサンバラ山地がケニアとの国境を画している。またマラウイ湖の北側には 2000m 級のキペンゲレ山地が位置している。

最もタンザニアらしい風土が感じられるのはマサイ高原のある内陸のサバナ地帯であろう。ダルエスサラームのある海岸地帯から西に走ってモロゴロに至り、山岳地帯を超えるとその草原に入る。ここがマサイ族の世界である（写真 6, 7）。太陽が西の地平線に沈んで涼しくなると彼らは行動を開始するのであろうか、その様子が写真の下にあるろうけつ染めによく表現されている。彼らは驚異的な視力を持ち、通常の方法では計測不能な 3.0~8.0 程度と推測され、優れた暗視能力も併せ持つので、暗いところでも不自由なく行動できるのである。

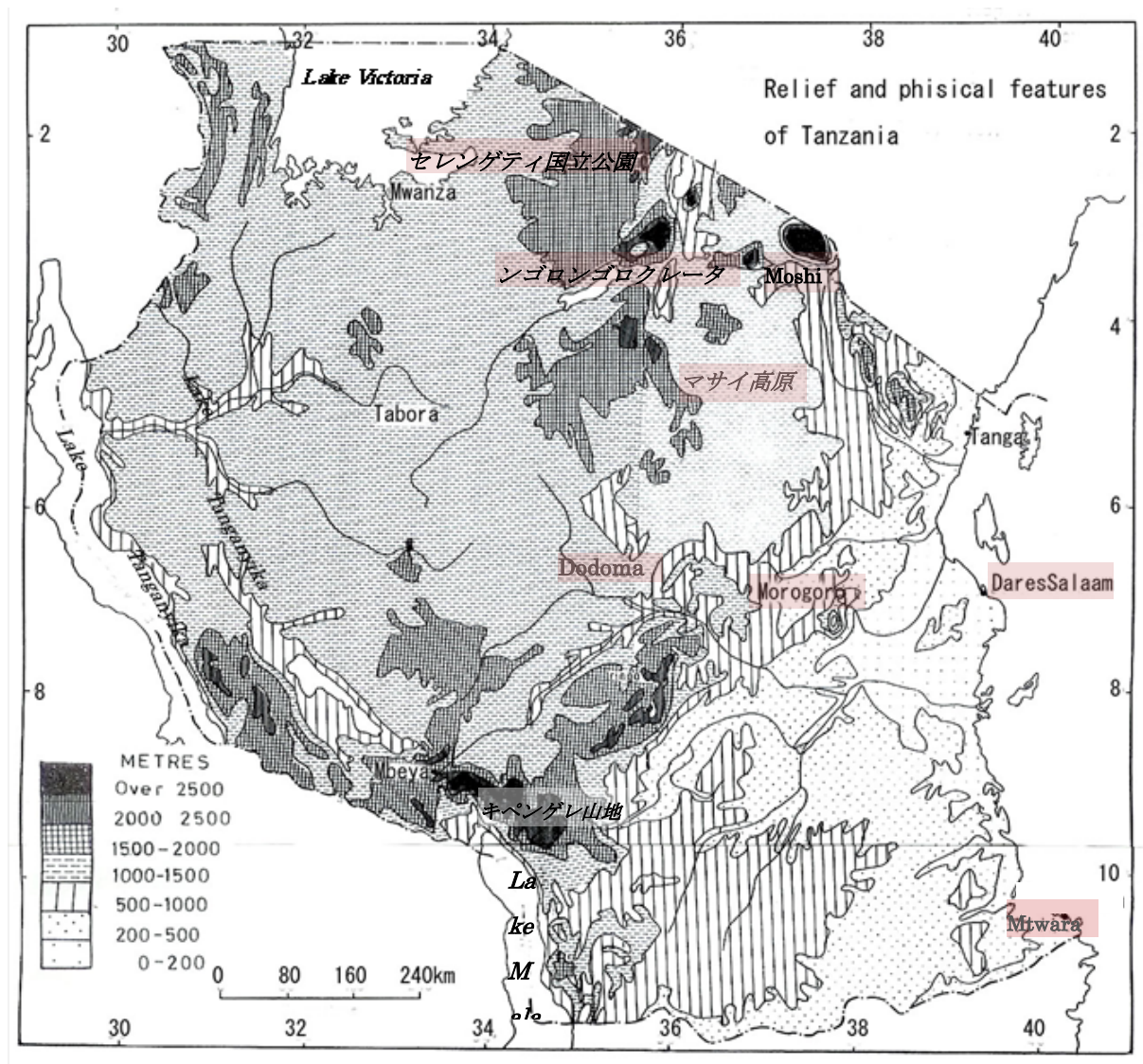


図 3 タンザニアの地勢

(着色は本文にてでくる場所)





写真6 日暮れのマサイ高原  
(前方の植物はタンザニア特産のサイザル麻)



写真7 夕日の中のマサイ族  
(単純なろうけつ染めながら、よくその特徴が表現されている。女性はマサイ族特有の首飾りをつけている)  
(80cm×50cm)



写真 8 マサイの戦士  
(材料は黒檀、高さ約 50 cm)



写真 9 マサイの男性  
(高さ約 25 cm)

マサイ族といえば、ケニア南部からタンザニア北部一帯に居を構える先住民で、「マー語を話す人」という意味である。なおマー語はナイル系の言語と云われている。伝統的な生活を守って暮らしている民族で、非常に勇敢でプライドが高く、草原の貴族とも呼ばれる。もともとマサイ族が遊牧を行っていた土地の多くは、動物保護区や国立公園などに指定されていて、以前は彼らが自由に遊牧を行なうことができなかったが、筆者が滞在した当時は動物保護区内での彼らの遊牧が許可されるようになっていて、その姿をよく見かけることができた。これには色々な事情があるようだが、自然の中のマサイ族そのものも観光資源にしようという狙いもあるような気がする。

かつては（多分今日でも）彼らが行動するときは必ず二人ずれで行い、万一猛獣に襲われた場合は一人がその目標にされている間に他の一人がこれを槍で仕留めたということだし、そもそもライオンはマサイの姿をみると、むしろこれを避けるともいわれている。

これは彼らの体臭や赤色の着衣が関係しているのだと現地で聞いたことがある。いずれにしても元々はマサイ族にと

って、ライオンを打負かすことは一人前として認められるための風習であつたらしい。写真 8 はマコンデ彫刻（後述）のマサイの戦士、写真 9 は典型的なマサイの男性の横顔である。

マサイ族は多くは身長が 2m 近くもあり、スタイルは抜群で、背広を着せて銀座あたりを歩かせたら、女性は一様に振り返るのではないかと思うくらいの男前が多い。

そのような意味を込めたものだろうか、ポストカードにはその姿をモ



写真 10 槍を手にしたマサイの戦士  
(手にしているのは槍)





写真 11 モシ市テム川



写真 12 モシ市の水道水源の一つ



写真 13 民族衣装をまとった若い女性たち

チーフとしたマサイ族の姿が画かれることが多い(写真 10)。

マサイ高原と反対に“これが赤道直下の国か?”と思わず口に出してしまうような風土は北部のアリューシャ(Alusha)地方であろうか。キリマンジャロの山麓にあたるこの地方は水が豊富で至るところに湧水や水流が見られるからである(写真 11)。湧水を水源とする水道も各地区に敷設されている<sup>脚注</sup>(写真 12)。この辺りには数多くのバナナ農園があり、原色の派手な民族衣服をまとった若い女性たちが頭上の籠にバナナをのせて運んでいる姿が散見される(写真 13)。

このような風景を、乾燥した草木を素材として切り絵にし、そのポストカードがホテルの売店におかれていたりする(写真 14)。



写真 14 草木を素材とした切り絵①

脚注：この地方の地下水はフッ素濃度が高く、その対策が大きな課題になっている。



アリューシャから北西方向に続く、ケニアとの国境をなす山岳地帯はタンザニアで最も風光明媚な地域である(図4)。キリマンジャロ山(5895m)は言うに及ばず、メルー山(4565m)、ハナン山(3418m)などの名峰、セレンゲティ国立公園やンゴロンゴロ(Ngorongoro)自然保護区のある巨大クレーター、人類発祥の地とされるオールドバイ峡谷、マニヤラ湖、エヤシ湖など大小の湖沼群などがそれである。つまり水と緑の豊かな世界であり、また肥沃な農耕地

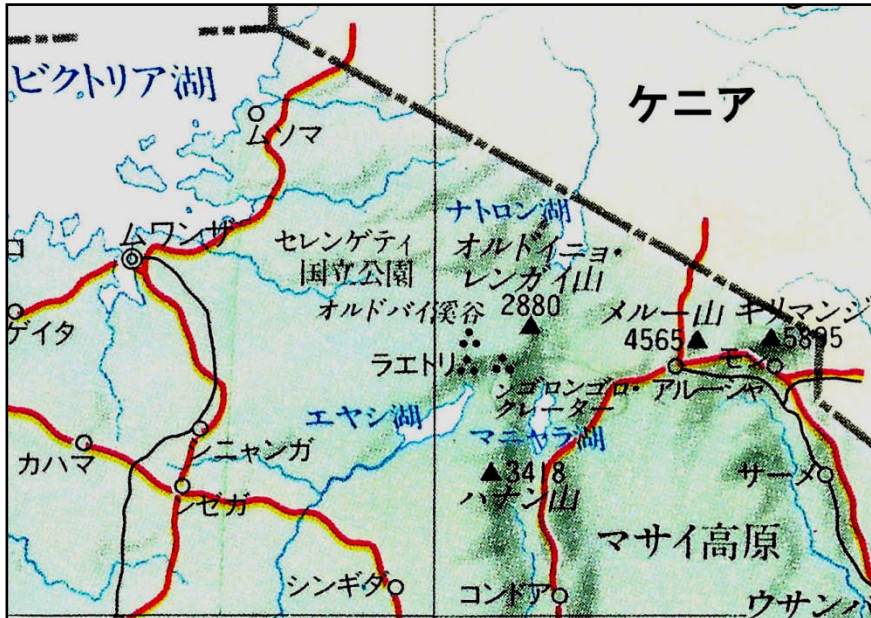


図4 タンザニア北西部地域

も展開し、それらの自然に囲まれた人々の営みは印象的である。その景観は遠く離れた中国雲南省北部の山岳地帯のそれと酷似しているのが興味深い(写真15, 16)。そのありようが素朴な切り絵や(写真17)、多分この地方の湖水を中心に画いたと思われる象



写真15 タンザニア北西部地域の農耕地

(Google Earth による)

徴的風景画の題材になっている(写真18, 19, 20)。





写真 16 タンザニア北西部地域の典型的な散村

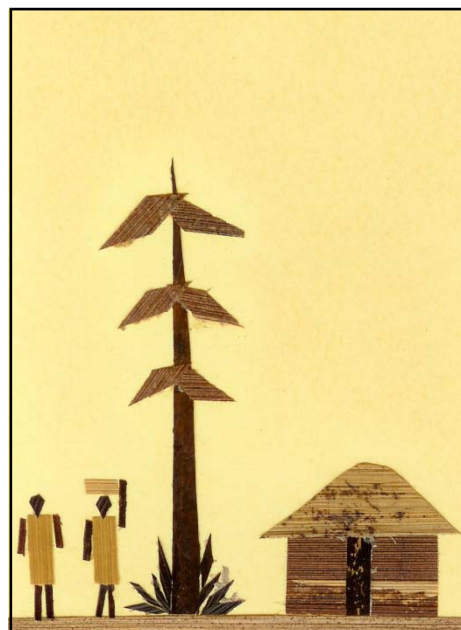


写真 17 草木を素材とした切り絵②



写真 18 ンゴロンゴロ自然保護区付近の湖畔民家



写真 19, 20 湖畔の民家

### (3) 民芸の背景としての自然と人間

これまでに述べてきたことと重なるが、あらためてこのことについて想像をめぐらせてみたい。勿論専門外のことなので、勝手な思い込みが強いことをお断りしたうえで、以下のような視点から考察してみる。

自然について

- ① 原色の世界
- ② スケールの大きな自然
- ③ 強烈な太陽光線
- ④ 厳しい地水環境

人間について

- ⑤ ウジャマー思想
- ⑥ 音楽好き，読書好き
- ⑦ “Jambo!” な人たち

#### ① 原色の世界

筆者の主なフィールドは **Dodoma** (ドドマ) というところで、この国のほぼ中央部に当たる。ここで最初に目にした強烈な印象は赤、青、緑のそれぞれが自己主張をしているような世界だということである。写真 21 はその典型で、大地はラトソル、ラトゾルまたは紅土とも呼ばれるサバナや熱帯雨林に特有の赤色土壌からなり、雲のあい間から見える青空とのコントラストが強烈である。この国で発達したといわれる **Tingatinga** 脚注) (ティンガティンガ) 絵画 (写真 22) や、印象画の題材となることの多い夕暮れの湖水の情景 (写真 23) は、まさにこの国の風土で、画かれるべくして画かれた、と感ずるのである。



写真 21 ラテライト質の土壌からなる大地

---

脚注：このような画法を考えだし、広めたタンザニア人の名で、この流れを汲む絵画の代名詞になっている





写真 22 ティンガティンガの流れをくむ絵画  
(麻布にエナメルペイントで画かれている)

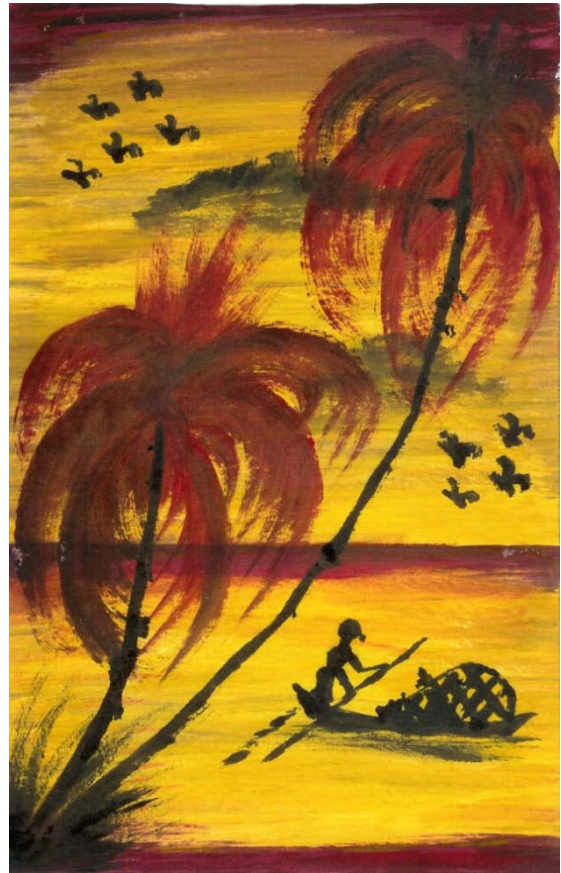


写真 23 黄昏の湖上

## ② スケールの大きな自然

国立公園や自然保護区では文字通り、詩誌に尽くし難い風景に接することが出来る(写真 24)。しかし、ンゴロンゴロ(Ngorongoro)自然保護区<sup>次ページ脚注</sup>を2度ほど訪ねた



写真 24 ンゴロンゴロ自然保護区のあるクレーター

が、あまりにも巨大なその景観を上手く画像に収められたことが無い。

上述のティンガティンガ絵画でも野生動物やそれを取りまく自然をモチーフとした作品は多い。またマコンデ彫刻でも野生動物(特に象)を彫ったものが多い(写真 25, 26)。

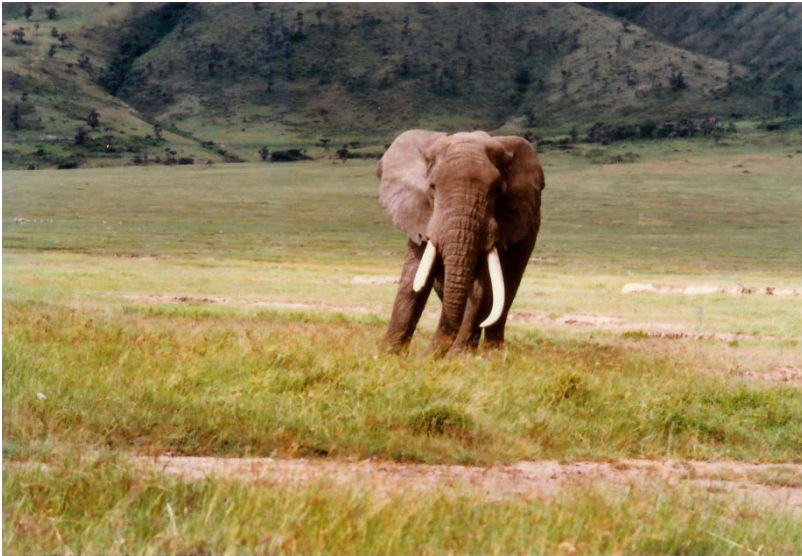


写真 25 インゴロンゴロ自然保護区の象  
(機嫌が悪そうで、こちらに向かって走ってきた)



写真 26 親子象のマコンデ彫刻  
(材料は黒檀、高さ約 12 cm)

### ③ 強烈な太陽光線

これは上に述べた、①との関連が深い。原色の世界は赤道直下という環境で誇張されるからである。日なたでは太陽の光が強烈に眩しく感じられ、日陰に入るとその反対に暗く感じられるという感覚的なものと言えるが、生まれた時からそのような環境で育ち、それが体に定着しているのであろうか。したがってティンガティンガ絵画のような原色豊かな絵画芸術は日本のような環境では生まれにくい。我が国でもこのような絵を画く人がいるが、これは“真似事”に過ぎない。

---

脚注：直径約 23 km で阿蘇山とほぼ同程度、かつてはセレンゲティ国立公園の 1 部だったが、人間の生活を認める地区として、1959 年セレンゲティから切り離された。国立公園であるセレンゲティでは、マサイ族の生活を見ることはないが、インゴロンゴロでは放牧をしている姿をしばしば見かける。





早朝から照りつける強い太陽光線を反射する写真27のような湖面の情景は我が国ではほとんど見ることはない。

写真 27 調査地近傍の人造湖（調査地区のホンボロ湖にて）

堰堤上を、着飾って列をなして歩く人々は多分礼拝に向かう途中であろう。  
なおこの地域には南アフリカ共通の特徴としてキリスト教の信者が多い。

#### ④ 厳しい地水環境

地形（土壌）と水文（気象）は人間生活の基盤的環境要因といえ、民族の習俗や感性、すなわち民族性といったものに与える影響は、それらが厳しいものであればあるほど、大きいものと考えられる。

##### a) タンザニアの気候区分

当国の土地・住宅・都市開発省 (Ministry of Lands, Housing and Urban Development) が作成した "Climate and Design in Tanzania" による気候区分図によると、図 5 のように国土は大きく 6 つに区分される<sup>脚注1)</sup>。この図で特に目立つのは西部から中央部、北東部、南西部にみる高原地帯で、これが国土の約半分を占めていることである。この資料によると、その中でも標高の低い地域は気温が高く、年間降水量は 500 mm 以下の半砂漠地帯となっており、人口密度が全国で最も低く、生活環境としての快適性の最も低い地域と評価されている。一方東部の海岸地帯は平均気温は、最高で 29~31℃、最低で 21.5~25℃、降水量は 750~1,500 mm、西部の湖水地帯では平均気温は最高で 26~28℃、最低で 16~18℃、降水量は 800~2,900 mm と高原地帯との差が顕著である。

##### b) 土地の肥沃度、可能利水量

図 6 の国土の肥沃度と図 7 の可能利水量の分布図はダルエスサラーム大学の S.A.Hathout (1983) による "Soil Atlas of Tanzania" の一部で、この 2 つの地水環境の厳しい地域が図 5 の高原地帯とほぼ一致している点が注目される。特に西部から中央部にかけての地域が厳しい環境にあることが読みとれる。

この地域はいろいろなタイプの woodland, bushland, grassland が混じりあっているところで、南アフリカ特有の景観をなしている。スワヒリ語でミオンボ (Miombo) と

---

脚注 1：この気候区分の原典は UNESCO(1967)による。

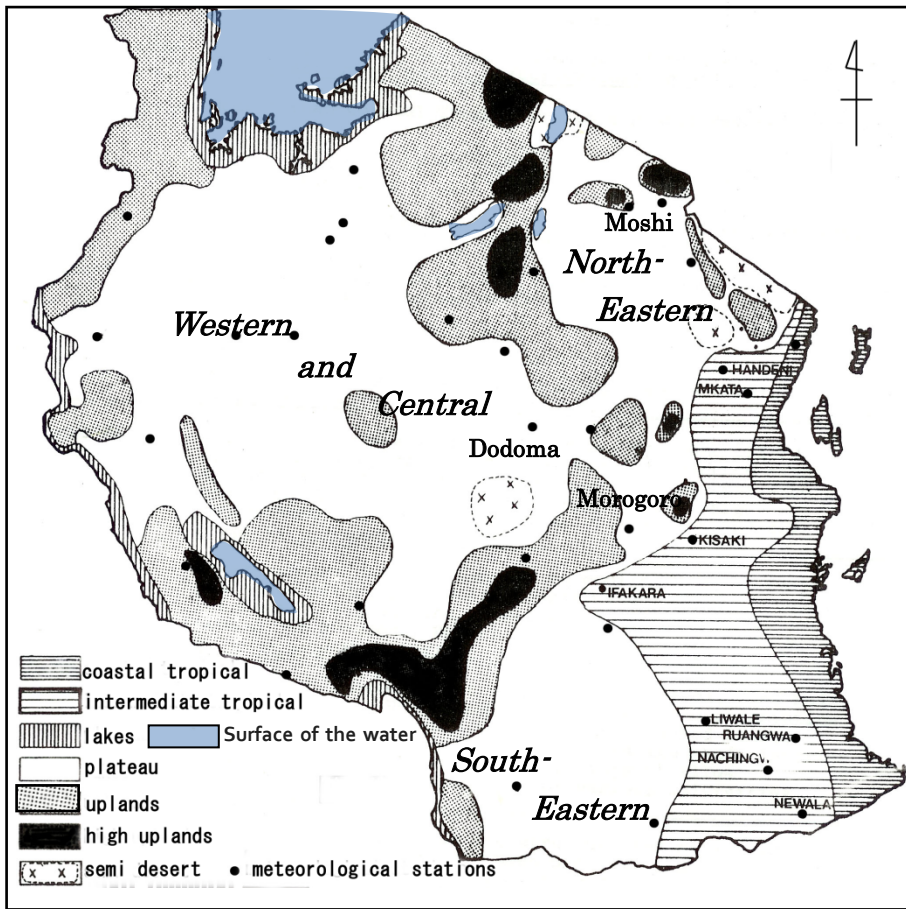


図5 タンザニアの気候帯

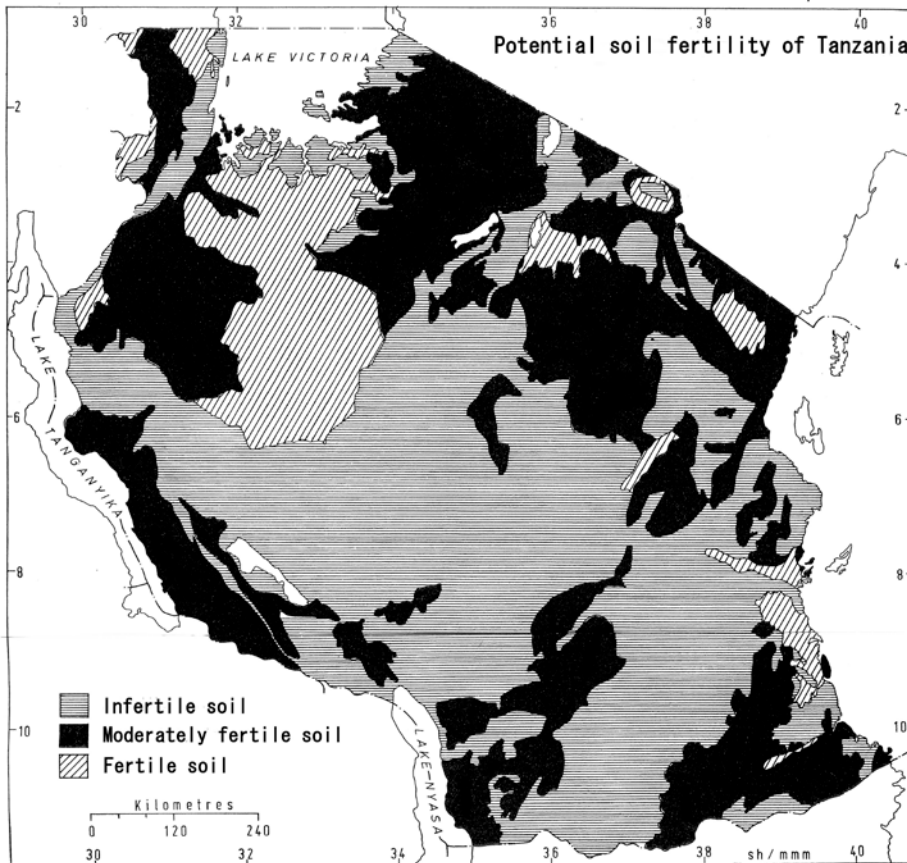


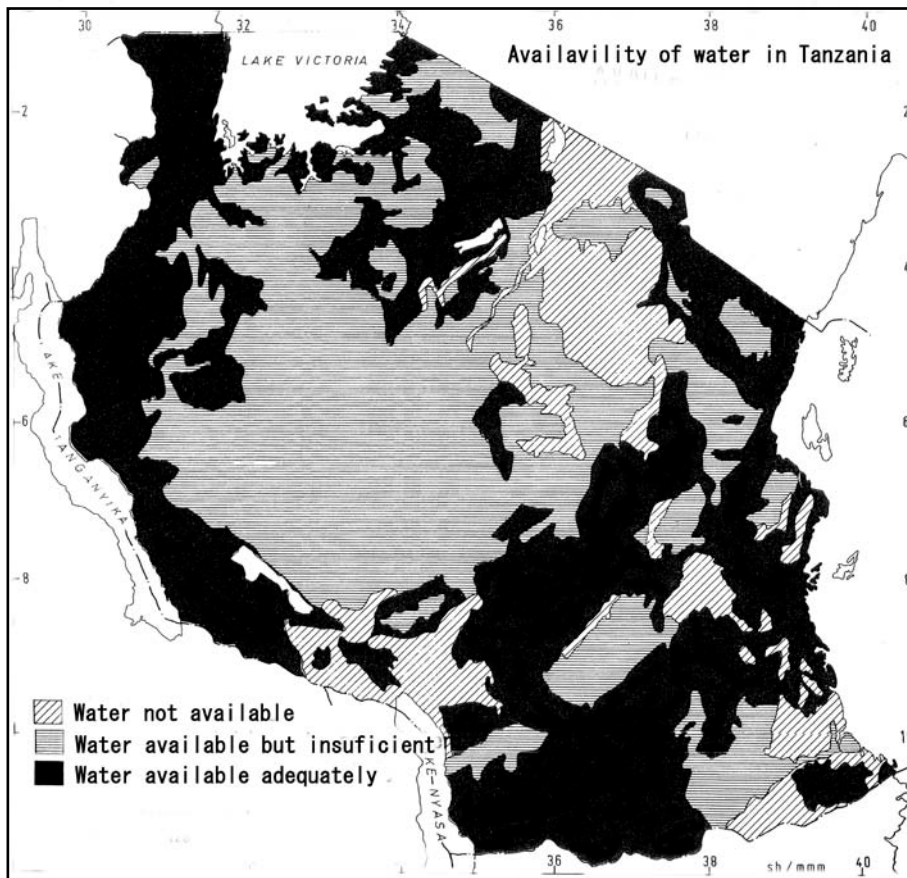
図6 肥沃度の分布

よばれる。しかし近年焼畑農業や放牧地のほか、薪炭用材の供給地としての乱開発が進んで裸地化した土地が広がり、環境上問題となって来ている(写真28)。

保護地区として指定されたところでの不法伐採もおこなわれ、木炭に加工されて、現金収入の手っ取り早い手段として、市場や路傍で売られている。豊かな生活への志向は、タンザニアの中でも特に貧しいこの地域でも他と変わらず、それは再生不可能な資源の食いつぶし(次ページ脚注)と引き換えによってなされているといってもよい。

図7の可能利水度は降水量と可能蒸発量の差を指標としたものと思われるが、





基本的には降水量に支配される。図8はその降水量の分布で、広大な面積を占める中～西部高原地帯の欠水性、あるいは貧水性が如実に示されている。

図7 可能利水度の分布



写真 28 中部高原地帯 (失われつつある“ミオンボ”  
(違法伐採か)

脚注：裸地化とともに台地は強烈な太陽熱に晒されて表土の固結化が進み、降雨時の表面流出を助長させる。同時に土壌の侵食が進んで岩石が露出する。こういったプロセスは加速的に進行する。

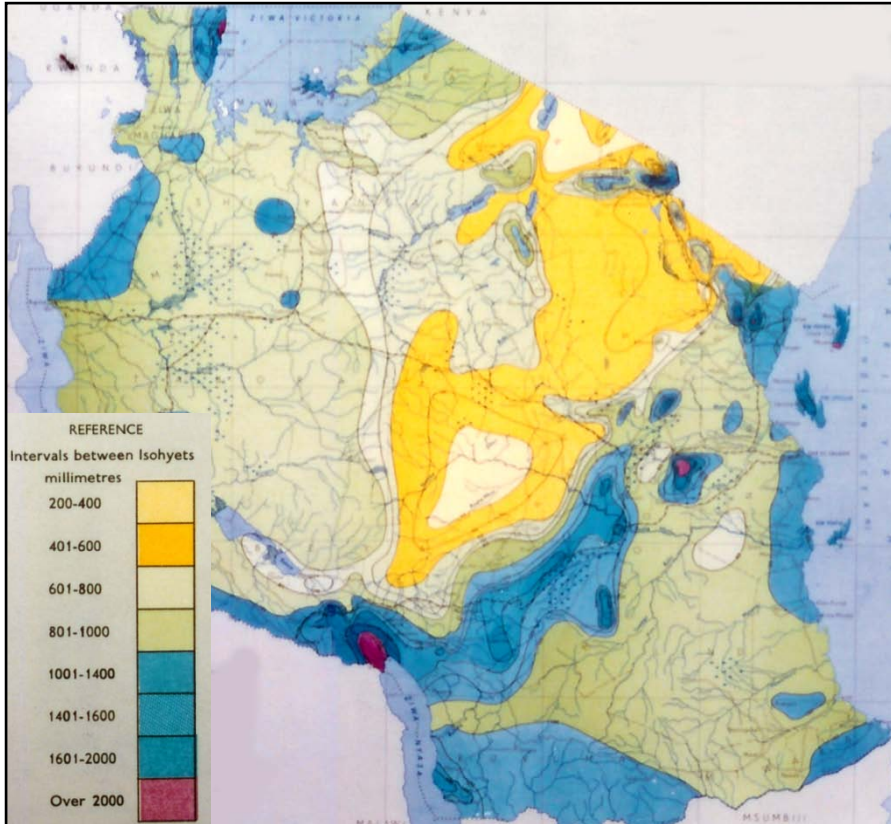


図 8 降水量分布

(出典：タンザニア国土情報図)

### ⑤ ウジャマー(Ujamaa)思想

ウジャマーとはスワヒリ語で“家族的な連帯感”といったようなことを意味するもので、英語ではよく“brotherhood”と訳されることが多い。タンザニア初代大統領のニエレが国是の柱とした理念である。この思想が現在この国にどこまで根付いているのかはわからないが、130もの部族からなる国にもかかわらず、今日まで大きな民族紛争が起こっていないことからみても、その精神は定着しているといえよう。

その象徴ともいえる民芸をマコンデ(Makonde)彫刻に見ることが出来る。これはタンザニアの代表的な民芸品で、使われる材質は黒檀で、表面は普通の木であるが、中は黒くて硬い(写真 29)。その歴史は古く、300年くらい前まで遡るといわれ、タンザニアとモザンビークの国境にまたがる地方に住むマコンデ族が始めたと言われている。そのモチーフは、人が重なり合ったウジャマーの他、精霊(シェタニ)、人物、動物などがある。



写真 29 マコンデの材料の黒檀

(カキノキ科カキノキ属の熱帯性常緑樹)



写真 30 はこのうちのウジャマーと呼ばれるもので、いずれも一族の絆を象徴したものである。特に写真 30 は家長が一族をかかえ、守るという行為をあらわしていて、筆者が気に入っている民芸品の一つである。



(高さ約 50 cm)



(高さ約 25 cm)

写真 30 マコンデ彫刻(1)

これらの民芸品の発祥の地であるムトワラ(Mtwara)というところは、“マコンデ高原”と呼ばれるインド洋に面した海拔 500～800m の地帯で、年間を通じての気温変化が少なく、最高で 30℃前後、最低で 20℃前後である。降水量も多く、年間 750～1,500mm で冬期に多く夏期に少ない。植生の種類に富み、各種の果物を産し、海岸にはマングロ

ーブの林が繁茂する。内陸部では稲作も盛んに行われている。

もう一つの家族愛を彷彿させるマコンデ彫刻を写真 31 に示しておく。



写真 31 マコンデ彫刻(2)

マサイ族の夫婦(高さ約 25 cm)

家族 (高さ約 20 cm)

#### ⑥ 音楽好き、読書好き

これは筆者の思い込みが強いかも知れないが、このことはたまたま街の売店で購入した2体の彫塑像(写真 32)のあまりにもリアルな表情からそのように感じていたし、また接触した現地の人たちや、滞在したホテルで毎晩のように深夜まで続けられる太鼓と歌声の“騒音”で悩まされた経験からの実感である。

また現地の小学生の教科書を見せてもらったが、何代にもわたって利用されたのか、繰り返し繰り返し読まれたのか分からないが、擦り切れたページの様子からタンザニアの人たちは読書好きではないかと思った。

一方、右の写真は一種の親指ピアノともいべきもので、現地ではカリンバとかイリンバと呼ばれ、その他にも多くの呼び名がある。金属の棒を木の箱などにとめ、親指ではじくだけのシンプルな構造の楽器で、左右の親指で金属棒をはじいてでる透明な音である。これはタンザニアやジンバブエをはじめ、サハラ以南のアフリカの多くの国で愛



用されている。なおオルゴールはこれからヒントを得てつくられたともいわれている。小さくて持ち運びに便利なので、畑仕事の合間や日常の中でも大人が個人の楽しみとして弾くことがおおい。



写真 32 読書と楽器を楽しむ  
(高さはいずれも約 15 cm)

この地で聞く太鼓を主体とする激しいリズムと、この楽器で奏でられる物静かな響きとの整合性が理解しにくい、それぞれのベースの地の自然環境が大きく影響していると考えてもよいように思われる。すなわち半乾燥地帯のマサイ高原（写真 33）では太鼓<sup>脚注</sup>が似合い、静かなミオンボの森ではこのカリンバがよくマッチしているようである。

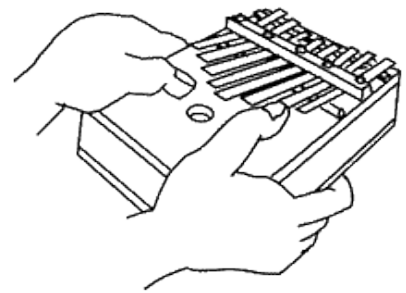


写真 33 半乾燥気候のマサイ高原

---

脚注：脚注：スワヒリ語で太鼓のことをンゴマと称するが、同時に伝統的な芸能・音楽をも指している。乾燥しているところほど良い音が出るし、それは広範囲に広がる。

⑦ “Jambo!” な人たち

“大きな” という意味の英語の Jumbo とは異なる。スワヒリ語では一日中何時でもこれが挨拶言葉になる。“やー!” や、時と場合によっては“よしっ!” がびったりの場面もありそうである。詳しいことは分からないまま、筆者はこのような気持ちの時に“ジャンボ!” の言葉で済ませていたが、彼らはそれを受け入れていたところを見ると、そのような意味あいもあるのではないかという気がする。また“そらっ!”、といった気合を入れる時などに手っ取り早い言葉として勝手に使ったりしていたし、それに応えてくれた。とにかく明るく、素直な人たちである (写真 34)。



写真 34 観測施設建設の協力者たち

一方まじめで仕事は器用にこなす。村にはそのような“何でも屋”がいて、我々の仕事の上でも、観測施設などの絵を書き、目的を説明してやると、殆ど支障なくつくりあげてくれた。最後にその幾つかの例を紹介しておく (写真 35, 36, 37, 38)。



付：タンザニアのキリスト教は信者数が40%と多く、人間性の形成に深く関わっている (原画は現地で入手したもの)





### 流出率の観測施設

(写真 35)

傾斜、植生の有無、土質を変えて複数個所に設置。コンクリートブロックを含めて全部手作り

傾斜、植生の有無、土質を変えて複数個所に設置。コンクリートブロックを含めて全部手作り。



すべて表面積は  $16\text{m}^2$  に統一、末端部に流亡土砂用のトラップを付設

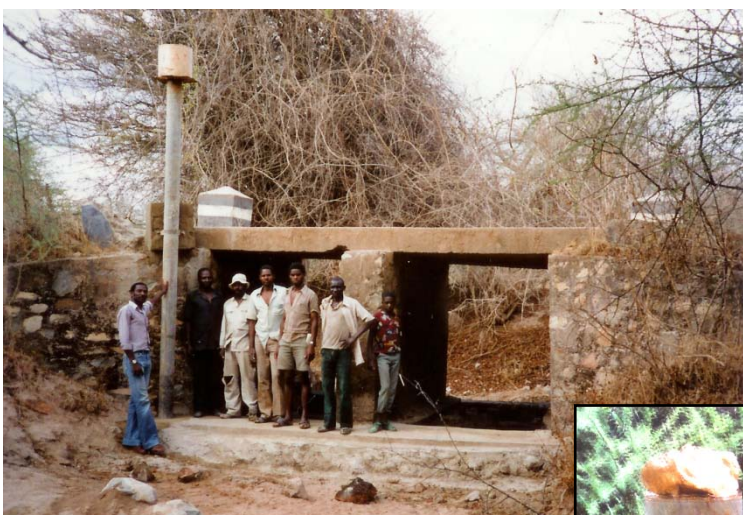
コテを使っているのが器用な現地の“何でも屋”



### 降雨実験



地下水位観測孔の建設  
(写真 36)



堰の建設  
(写真 37)



測量  
(写真 38)

